



Title	「自分自身との創造的な共生」に向けて
Author(s)	桂, ウスマン
Citation	未来共生学. 2017, 4, p. 433-436
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60708
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「自分自身との創造的な共生」 に向けて

ウスマン 桂

大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

異なる他者と共に生きる社会を実現していくためには、その社会を担う個人が生き生きと「自分らしく」あることが不可欠だろう。しかし、現代の日本においては、自ら自分らしさを抑圧せざるをえないことがしばしばある。

自分らしい「私的な自分」をプライベートな領域に閉じ込めずに、いかに「社会的な自分」の行動として実践していくことができるだろうか。実際に行った対話の事例から考えてみたい。

筆者が企画する共生学勉強会の一環として、2016年9月26日、大阪大学吹田キャンパスにて「私たちの暴力？」というタイトルで対話を開催し、筆者を含め5名が参加した。

この対話で考えたかったのは筆者を含めた、ある社会においてマイノリティ性を感じずにいられる人々がどのような時に自分自身や身近な人を抑圧してしまっているかということである。

対話にあたっては共生社会を担う個人を、しばしば自分らしさを抑圧する公的な「社会的な自分」と自分らしさを担う「私的な自分」からなるものと設定し、両者がいかによりよい関係を築いていけるかを模索した。

その際、未来共生学で提唱される以下の共生モデルを参照・応用した。

(未来共生学における共生モデル)

- ・同化主義モデル： $A + B \rightarrow A$
- ・統合主義モデル： $A + B \rightarrow A + B$
- ・未来共生モデル： $A + B \rightarrow A' + B' + \alpha$

(対話での応用モデル)

- ・同化主義モデル：社会的な自分 (a) + 私的な自分 (b) $\rightarrow$ 社会的な自分 (a)
- ・統合主義モデル：社会的な自分 (a) + 私的な自分 (b) $\rightarrow$ 社会的な自分 (a) + 私的な自分 (b)
- ・未来共生モデル：社会的な自分 (a) + 私的な自分 (b) $\rightarrow$ 社会的な自分' (a') + 私的な自分' (b') + α

上記のモデルにおいてA、Bはそれぞれ社会におけるマジョリティ、マイノリティを意味する。A、Bはそれぞれ「異なる集団や個人」が想定されており「同一の個人」内部の共生は想定されていない。

しかし、「共生」をより多角的に考えるため、ここでは個人の内部で時にコンフリクトを起こし打ち消しあうa、bを想定してみよう。

Aのマジョリティ (majority)が英語で「大多数」の他に「成人」を意味することから、成人するにつれ、担う「社会的な自分」をaとした。またBのマイノリティ (minority)が「少数」以外にも「未成年」を意味することから、赤ちゃんや、こどもの時から育む「私的な自分」をbとした。

個人における同化主義とは、ひたすら滅私奉公するような生き方であり、統合主義は公とプライベートを区別し、プライベートで自分らしさを発揮するような姿だろう。

この統合主義的な「自分」はa、bのバランスが取れているうちはいとしても、aがbを抑圧することで鬱に陥り、逆にbがaを凌駕する時、私的な領域に引きこもることになりかねない。

では、個人における未来共生モデルとはどのようなものだろうか。

具体例を参加者の一人、居酒屋で働きながら劇団に所属するTさんの語りから考えてみよう。

私、最近楽しいのはなんかその、統合主義的なものからちょっとフェーズが変わった感じがあったんだなって、今日話を聞いてわかりました[…]

統合主義のaとbがこう増えたり減ったりでバランスとってやってるのが、ちょっと変わってきたなと思って。すごい楽しい、じゃないですけど楽？っていうか。楽しいですけどね(笑)。

この「フェーズが変わった」きっかけの一つは、自分で「行動の基準を決めた」ことだったという。

Tさんはこどもの頃から人助けが好きだった。しかし、仕事帰りの繁華街で、酔いつぶれて道端に寝てしまっている人を見かけるたび、迷いながらも「周りの目を気にして、まっ息してるし、いいか」と声をかけられなかった。「周りの目を気にする自分 (a)」によって「助けたいと思っている自分 (b)」が表に出せていなかった。

ある時、この「周りの目を気にする自分 (a)」に変化が起こった。

周りの人の目が気にならなくなって、なぜなら私が私のために、声をかけるって決めたからなんですけど […。決めるっていう風にしたのは、助けたいから助けてるのって、人に突っ込まれたら、ヒロイズムじゃないですけど […。そこに対する言い訳として「私決めたからやる」って言えるなって思ったんです。

さらにTさんは声をかけた相手に実際に何かあった場合、また劇団スタッフとしてお客さんが倒れた場合のためにも救急救命 (AED) 講習を自主的に受けた。

「助けたいと思っている自分 (b)」が自分の行動基準を定め「実際に助ける自分 (b')」へと変化すると同時に「周りの目を気にする自分 (a)」

が「周りの目が気にならない自分(a')」となる。

この変化は結果的に「酔いつぶれた人々が助かる」という利他的な $+\alpha$ を生みだす。「社会的な自分' (a')」と「私的な自分' (b')」による創造的な共生の姿だといえる。

ここで注意すべきは、Tさんにとって以前の「周りの目を気にする自分(a)」の「周りの目」自体が、実は身近な人や、自分自身の「想像」によるものであったということである。

茶々をいれてくる人っていうのは、赤の他人ではないです。イメージとしては。一緒に帰ってた友達であるとか、わたしが助けてるさまを、例えば知ってる人が目撃するであるとか、っていうこととか、その…想像力ですけど(笑)。

裏を返せば「周りの目」は自分自身で変えることができる。実際にTさんは自分自身で「行動の基準を決める」ことで、「周りの目」および、「周りの目」によってつくられる「社会的な自分(a)」を変化させた。

各個人が自分自身を抑圧しないような社会を実現するためには、このような「行動の基準を決める」ことをはじめ、自分らしさを発揮するための様々な方法について、その動機や、可能となる状況を具体的にみていく必要があるだろう。

その際、社会の中でマイノリティ性を感じており、「私的な自分(b)」を表に出すことが苦痛となるような人々にとっての「自分」や自分らしさのありかたについても慎重に検討しなければならない。

異なる「他者」との共生という視点だけでは見逃されがちな、「自分自身との創造的な共生」のあり方を模索していくことは、多くの人にとって応用・実践可能となる「未来共生」の重要な取り組みの一つとなるのではないだろうか。